

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の 1年度目)

1. 研究課題

(和文) 第一次世界大戦の総合的研究

(英文) A Trans-disciplinary Study of the First World War

2. 研究代表者

(氏名) 山室信一・岡田暁生

3. 研究期間

平成 22 年 4 月 から 平成 25 年 3 月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

本研究は「世界性」および「現代性」を切り口として、第一次世界大戦とそれが与えた二〇世紀社会へのインパクトを明らかにしようとするものである。「世界性」とは、ヨーロッパの戦争にアフリカやアジア（オーストラリア・ニュージーランドを含む）の人々が大量に動員されたとか、戦線がアフリカやトルコにまで広がっていたといったことだけではない。第一次大戦を視察した日本の軍人が「総力戦／持続戦（永久戦）」というビジョンを膨らませていき、それがやがて15年戦争に至るとか、あるいはこの「永久戦争」のビジョンとは逆に「恒久平和」が模索されるようになって、第一次大戦後の国際連盟の成立になるとか、第一次大戦における「ヨーロッパ文化の没落」が非ヨーロッパ地域の人々にとってある種の解放感を与えることになるといった、現代にまで至る「事後的」で「グローバルな」インパクトを視野に入れない限り、ヨーロッパの国内戦争を超えた世界戦争としての第一次大戦の意味は見えてこない。この「現代性」および「世界性」という二つの切り口から第一次大戦を眺めることが、本計画の基本スタンスである。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

2011年度は計16回の研究会を実施した。そのうち3回はシンポジウム形式とし、それぞれ「第一次大戦と文化の並行／非並行関係」、「第一次大戦における世界性および総体性」、「第一次大戦の継続性（終わらなかった戦争としての第一次大戦）」の問題について、これまでの研究を総括すると同時に、新たな問題設定を意図して討論を行なった。また5月には西部戦線（ベルギーのイープル、フランスのアミアンおよびソンムなど）に戦跡調査を行なっている。さらに2011年度には、ベルリン自由大学によるInternational Encyclopedia of the First World War 1914-18プロジェクトとの研究提携を開始した。これは従来の戦史中心／ヨーロッパ中心／ナショナル・ヒストリー中心の第一次世界観を克服すべく、思想・芸術も射程に入れつつ、第一次世界大戦における「世界性」に焦点を当てた総合研究を目的としており、その成果はOxford Pressから出版の予定である。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

2011年度はとりわけ日本（アジア）にとっての第一次世界大戦の意味について、多くの知見が得られた。従来日本では第一次世界大戦についての総合的な研究はほとんど行なわれておらず、例えば第一次大戦中の日本の出来事としても、青島の占領、対華21か条の要求、シベリア出兵、五・四運動が何の関係もないかのように、ばらばらに記述されるというようなことが常態化していた。しかしながら、実はこれらはすべて第一次世界大戦の一環なのであり、さらに日本にとっての第一次世界大戦は日露戦争の戦後処理という意味をもっており、また英米と熾烈な外交戦が繰り広げられていたという点では、第一次日米戦争でもあったという複層性が明らかになった。一見異なった諸現象の間に、第一次世界大戦という軸を入れることにより、こうしたグローバルかつ超領域的な連関を見出し、それによって「総体」として連動して動く20世紀的な「世界」の一端をさらに明らかにしていくことは、本研究の今後の課題でもある。

7. 共同研究会に関連した公表実績 (出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など)

2011年度にはこれまでの研究成果の総括として、人文書院より「レクチャーシリーズ 第一次世界大戦を考える」全六巻を刊行した。その内容は 小関隆『徴兵制と良心的兵役拒否』、岡田暁生『クラシック音楽はいつ終わったのか?』、山室信一『複合戦争と総力戦の断層』、藤原辰史『カブラの冬』、久保昭博『表象の傷』、河本真理『葛藤する形態』である。これらの著作はすべて新聞等の書評に取り上げられている。また昨年度は後期に、第一次世界大戦についての全学共通講義（リレー形式）を行なっている。